

第3学年 算数科学習指導案

令和7年10月2日 3校時

小学校 第3学年 名

1 単元名 あまりのあるわり算

2 単元について

本学級の児童の多くは、算数が好きで課題解決に向けて一生懸命取り組んでいる。これまでに児童は、1学期の「わり算」の学習で、九九を1回適用して求めるわり算や答えが九九にない簡単なわり算等、いずれも割り切れる場合のわり算を学習している。その際に、解き方を理解して九九を唱えたり、除法の適用場面から立式したりして答えを求められるようになった児童が多く見られた。しかし、等分除と包含除の意味理解が不十分で、図や言葉で表現することのできる児童や、文章問題で求めた数の単位を正確に表した児童は少なかった。また、知識や計算技能における個人差も大きい。

本単元では、わりきれない場合のわり算の意味やその仕方などについて取り扱う。日常生活の中では、余りを出したままで終わるのではなく、余りを適切に処理する場面もある。そこで、本単元では、余りの意味やその計算の仕方を理解し、わる数と余りの大きさの関係を捉えたり、場面に応じて余りを処理したりできるようにする。さらに、実生活や学習に活用しようとする態度を養いたい。この学習は、第4学年の「1けたでわるわり算の筆算(1位数でわって商が2位数以上となるわり算)」へと発展していく。

本時では、等分除の場面で余りがある場合の除法が適用できるかを考える。さらに、等分除と包含除についての意味理解を整理する。まず児童は、日常生活の場面の適用題から、自力解決に取り組む。ブロックを操作しながら、図や言葉で表現をすることができるようになる。次に、クラス全体で考えを共有し、答えを導きだすことができるようになる。さらに、包含除との相違点に気付くことができるように図を比較する。学習を進める中で、あまりのあるわり算のよさに気づき、生活や学習に生かす児童を育てたいと思いこの単元を設定した。

3 単元の目標

- (1) 割り切れない場合の除法の意味や余りについて理解し、それが用いられる場合について知り、その計算が確実にできる。
- (2) 割り切れない場合の計算の意味や計算の仕方を考えたり、割り切れない場合の除法を日常生活に生かしたりすることができる。
- (3) 割り切れない場合の除法に進んで関わり、数学的に表現・処理したことを振り返り、数理的な処理のよさに気づき、生活や学習に活用しようとしている。

4 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<p>①包含除や等分除など、除法の意味について理解し、それが用いられる場合について知っている。</p> <p>②除数と商が共に1位数である除法の計算が確実にできる。</p> <p>③割り切れない場合に余りを出すことや、余りは除数より小さいことを知っている。</p>	<p>①除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図などを用いて表現している。</p> <p>②余りのある除法の余りについて、日常生活の場面に応じて考えている。</p>	<p>①除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図などを用いて表現しようとしている。</p> <p>②除法が用いられる場面を身の回りから見付け、除法を用いようとしている。</p>

5 単元計画(8時間)

時間	ねらい・学習活動	評価規準(評価方法)		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	日常生活の中でもものを分けるとき、余りがある場合について考え、単元のめあてをつかむことができる。 ・余りがない場合とある場合の生活のなかから想起し、答えの見つけ方を具体物や図などを用いて考える。		・思①(行動観察、ノート分析)	・態①②(行動観察、ノート分析、算数日記)
2	余りがある場合の除法の式と表し方や、余りなどの用語を知り、余りと序数の関係を理解することができる。 ・余りと序数の関係を調べる。	・知①(ノート分析) ・知③(ノート分析)		
3	等分除の場面についても余りがある場合の除法が適用できるかを考えることができる。 ・等分除の場面で、答えの見つけ方を考える。		○思①(行動観察、ノート分析)	
4	余りがある場合の除法計算について、答えの確かめをすることができる。	・知②(ノート分析)		
5 6	日常生活の場面に当てはめるときに、商と余りをどのように解釈すればよいかを考えることができる。 ・商に1を加える場合や加えない場合について、それぞれ考える。		・思②(行動観察、ノート分析)	○態①②(行動観察、ノート分析、算数日記)
7	学習の内容の定着を確認し、理解を確実にすることができる。	・知①②③(ノート分析)		○態②(ノート分析、)
8	学習内容の定着を確認する。	○知①②③(ペーパーテスト)	○思②(ペーパーテスト)	

※指導に生かす評価を行う代表的な機会については「・」を、その中で特に学級全員の児童の学習状況について、記録に残す評価を行う機会には「○」を付けている。

6 本時の学習

(1) 目標

等分除の場面についても余りがある場合の除法が適用できるか考える。

(2) 展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援	具体の評価規準 (評価方法)
<p>1 問題文から立式して、学習のめあてをつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>チョコレート16こを、3人に同じ数ずつ分けます。</p> <p>1人何こになって、何こあまりますか。</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> 立式した理由を尋ねることより、包含除の立式との相違点を見つけられるようにする。 	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: auto;"> <p>1人分の数と、あまりをもとめよう。</p> </div>		
<p>2 各自、ブロックや図を使って考える。</p> <p>3 1人分の数は何個になり、何個あまるか、話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 自分の考えと違うところなど、聞いてみたいところを質問する。 ブロック操作の仕方は包含除と異なるが、計算の仕方は同じだということをまとめる。 <p>4 振り返りをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> 本時にあった作問をする活動を通して、本時の振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 考えが停滞している児童に対しては、教師が順序立てて発問・助言することにより、問題場面の状況を把握しながら、ブロックの操作を進められるようにする。 考えた図をタブレットで撮影し、TV画面へ映して、クラス全体で共有できるようにする。 包含除の図を用意し、クラス全体で等分除と比較して、考えられるようにする。 本時の学習内容を整理し、等分除を意識した場面が考えられるようにする。 	<p>○思①除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図などを用いて表現している。</p> <p>・態①除法が用いられる場面の数量の関係を考え、具体物や図などを用いて表現しようとしている。</p> <p>・態②除法が用いられる場面を身の回りから見付け、除法を用いようとしている。</p>

(3) 評価する状況と具体的な支援

「十分満足できる」と判断される状況	<ul style="list-style-type: none"> 包含除との違いを明らかにしながら、余りがある場合の除法が適用であるか説明している。 相手の説明が妥当かどうかを考えながら発言している。
「おおむね満足できる」状況を実現するための具体的な支援	<ul style="list-style-type: none"> 児童の意識に寄り添って、思考のヒントになる言葉をかけ、問題場面の状況を考えることができるようにする。